京都の貴船神社－貴布禰総本宮－

本宮―高龗神＝伊弉諾尊の御子神、水を司る神
結社―磐長姫命＝木花開耶姫命の姉姫
奥宮―高龗神＝船玉神としての信仰も篤い（一説には闇龗神、玉依姫命も祀られていると伝わる）
高龗神・闇龗神については、社記には「呼び名は違っても同じ神なり」と記されている。
降雨・止雨を司る龍神であり、雲を呼び、雨を降らせ、陽を招き、降った雨を地中に蓄えさせて、それを少しずつ適量を湧き出させる働きを司る神である。
一般には、高龗は「山上の龍神」、闇龗は「谷底暗闇の龍神」といわれている。
水は万物の命の源。生きとし生けるものが命をつなぐために片時もおろそかにすることができない大切な水の供給を司る「水源の神」なのである。

由緒―御社殿の御創建を明記するものは何もない。ゆえに創建の年代は不詳ながら、天武天皇白鳳6年（約1300年前）にはすでに御社殿造替が行われたとの社伝があることから、貴船神社の創建年代は極めて古い。
貴船神社の起源については、貴船大神が御鎮座することになった伝説が記されている社記の中に見ることができる。

社記―「国家安穏・万民守護のため、太古“丑の年の丑の月の丑の日”に、天上より貴船山中腹、鏡岩に天降れり」とあり、よって“丑の日”が縁日とされているゆえんである。
　また別の伝説には、第18代反正天皇の御代（約1600年前）、初代神武天皇の皇母・玉依姫命が御出現になり、「吾は皇母玉依姫なり。恒に雨風を司り以て國を潤し土を養う。また黎民の諸願には福運を蒙らしむ。よって吾が船の止まる処に祠を造るべし。」と宣り給い、「雨風の國潤養土の徳を尊び、その源を求めて黄船に乗り、浪花の津から淀川、鴨川をさかのぼり、その源流である貴船川の上流のこの地（現奥宮）に至り、清水の湧き出づる霊境吹井を認め、一宇の祠を建てて水神を奉齋す」とあり、“黄船の宮”と崇められることになったと伝えられている。

【貴船大神の御出生】
　貴船大神の御誕生の神話は、「古事記」「日本書紀」に登場する。
○「古事記」には次のように記されている。
「伊弉諾命と伊弉冉命の夫婦神が力を合わせ、この地上にいろいろな神様をお生みになりました。そして伊弉冉命が最後に火の神をお生みになったとき、その火に身を焼かれ、ついに亡くなってしまわれた。伊弉諾命は≪ただこの一人の子のために、わが愛妻を犠牲にしてしまった・・・≫と恨み言を言われた。嘆き悲しみ涙した伊弉諾命。やがて憎しみ、腰に下げていた“十握剣”を抜き、火の神を断ち切ってしまった。剣の刃滴る血、鍔から滴る血、剣先から滴る血、剣の柄から滴る血、各々が神となった。（中略）剣の柄に溜まり、指の間から漏れ流れ滴る血がそそいで神となった。名付けて『闇龗』という。」

○「日本書紀」には次のように記されている。
「一書（第七）にいう。伊弉諾尊が剣を抜いて、軻遇突智（火の神）を斬って、三つに断たれた。その一つは雷の神となった。一つは大山祇神となった。一つは「高龗」となった。」
　一説には、本宮には『高龗神』、奥宮には『闇龗神』が祀られていると伝えられているが、社記には「呼び名は違っても同じかみなり」と記されている。
「神社考」によれば、『高龗は龍神也、貴布禰明神是也』とある。ちなみに『高龗神』の『龗』という漢字は『釋日本紀』（卜部兼方撰）によると『龍蛇の類をいう』とあり、“龍は雨を司る”との龍神信仰と深い関わりがあることがこの字から窺い知ることができる。さらに『高龗』の「高」は「たけ」の意で、「健」「猛」と同義語。対して、『闇龗』の「闇」は「深い暗い谷底」という意味。即ち「暗い谷の荒々しい猛蛇」という意味になる。

　かくして、火の神から生まれた神は、水神『高龗神』というわけなのである。人間にとって火はとても大事なものであるが、使い方を間違えると大きな災いを招く。その荒ぶる火を鎮めるために、火の神から水神が誕生したのである。火を鎮められるのは水だけである。ここに、火と水の大事な関係を窺い知ることができる。
（貴船神社のホームページより）